# 南島の古歌謡

小野重朗

新民俗文化叢書 2

新民俗文化叢書 2

# 南島の古歌謡

小野重朗

小野重朗（おのじゅうろう）
1911年広島県に生れる。民俗学，南島歌謡研究。
著書　『琉球文学』（弘文堂，1943年）
『農耕儀礼の研究』（弘文堂，1970年）
『南島歌謡』（日本放送出版協会，1977年）
『神々の原郷』（法政大学出版局，1977年）
現住所　鹿児島市城西二丁目八一九

検印
廃止

© 1977

南島の古歌謡　　コード番号 0039—22002—3411

印刷日　昭和五二年九月一二日　印刷
発行日　昭和五二年九月二二日　初版第一刷発行
著者　小野重朗
発行所　吉田嘉明
発行所　(株)ジャパン・パブリッシャーズ
〒一〇一　東京都千代田区外神田二-一-一四-一〇
第二電波ビル4F
振替　一—二五六五一
電話　〇三（二五一）三四四一
印刷　三信印刷工業
製本　美成社
装幀　戸川隆介

乱丁，落丁本はお取り換えいたします

# 南島の古歌謡　目次

はじめに——古代と南島歌謡 5
南島歌謡の発生と展開 11
I 南島歌謡の発生と展開
II 叙事歌について
紡織叙事歌考 67
稲の叙事詩 82
生産叙事歌をめぐって 98
III オモロの分離解読法
朝凪・夕凪のオモロ——分離解読法提唱—— 131

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

オモロの抒情性と作者――分離解読法批判に答えて――　156
こねりオモロについて　188
Ⅳ　オモロの探究
オモロにみる恋歌の発生　205
オモロにみる海洋文学の展開　234
オモロ歌人の性格　262
解説・谷川健一　299
初出発表誌一覧　302

# はじめに　――古代と南島歌謡――

『おもろさうし』第一〇巻の二四のオモロを挙げてみよう。簡単な訳も添えておこう。

一ゑ、け、上がる三日月や　　ああ　昇る三日月は
ゑ、け、神ぎや金真弓　　ああ　神の金の御弓
又ゑ、け、上がる赤星や　　ああ　昇る明星（金星）は
ゑ、け、神ぎや金真巻　　ああ　神の金の鏃
又ゑ、け、上がる群れ星や　　ああ　昇る昴星は
ゑ、け、神が差し櫛　　ああ　神の御櫛
又ゑ、け、上がる虹雲は　　ああ　上がる虹は
ゑ、け、神が愛きき帯　　ああ　神の御帯

オモロ学の創始者、伊波普猷氏が『おもろさうし選釈』で解説して以来、有名になったオモロである。この『おもろさうし』第一〇巻は「ありきゑと」という船漕ぎ歌を集めた巻であるから、これは船上で船をこぎながら歌った船歌である。ゑけはああという嘆声であると共に、櫂をこぐ掛け声でも

ある。この歌形をみれば、掛け声の部分を除くと三・五音律の句を続けて先に進む叙事歌形であり、具象的な物に即して述べていることでも叙事的だが、けんらんとした美感も、ゑけという詠嘆も明らかに抒情的で、叙事歌から抒情歌へと大きく転換しようとしているのがわかる。

このオモロは神を主題としながら、神への畏れも祈りもなく、のびのびと神や天体を賛美している。これは漁撈の民が独木船の上で歌った船歌ではなくて、南海の貿易にしたがう海洋民が巨きな帆船の上で合唱した船歌にちがいない。その意味でこれは尚真王前後の隆昌期にある琉球王国文化を代表する歌謡であり、文学であると言っていいだろう。

しかし、私の関心は、このような文化の香り高い歌謡よりも、その母胎となり、原形をなしたような、さらに古い歌謡の方に向っている。王国時代以前にあった南島の英雄時代や、村落共同体時代の歌謡を知りたいし、抒情歌の源流となった島々の叙事歌について調べてみたいと思う。

『おもろさうし』は琉球王府によって、一五三二年から一六二三年までの間に記録編集されたものだが、それより古い歌謡集は勿論ない。従ってさらに古い歌をみようとすれば島々村々に口承して伝えられている歌の中にそれを求めるほかはない。幸いにして南島では、近年このような口承歌謡の採集記録が進んでいる。それらは多くは村々の祭祀生活や共同の生産活動の中で歌い継がれたものである。

これらの歌謡は明治から昭和にわたって採録されたもので時間的には現在の歌と言えるのだが、その中に遠い古代や原始の時代の歌謡があるというのは、なかなか理解し難いかも知れない。先学の多

くの方たちも一六世紀に記録されたオモロと、現在歌われている長篇のクェーナとを比べて、オモロの歌形が変って新しくクェーナが生れたと考えたが、これは叙事歌クェーナの古さを実年代によって錯覚したためだったろうと思う。

現在の人々の行ない伝えている生活や、歌い伝えている歌謡の中には、時代的に極めて古い生活や歌謡が生き残って伝承されている。それは丁度、現在の高等な生物の中に単細胞生物や爬虫類のような古い生物が混って生き続けているのと同じ現象だと思ってもいいだろう。生物学は現在生きている下等な生物を調べて、生命の歴史を研究するし、民俗学は現在の生活の中に残っている古い生活を調べることによって、直接には知ることのできない生活の歴史を復原する。歌謡の研究もそれと同様に、現在に伝承された歌謡や、記録された歌謡を調べ、それらを年代、時代的に縦に並べてみることによって、歴史の中での歌謡の変遷や系譜やその機能を考えることができる。

問題は多くの伝承された歌謡の中から、これは古いもの、これは新しいものと、その時代や系譜をどのようにして判別するかということである。民俗学には民俗伝承の新古を判別し、その歴史的変遷を把えるための方法として〈重出立証法〉や〈民俗周圏論〉がある。重出立証法は互に似た幾つかの生活伝承があるとき、それを重ね合せて、その類似と相違を比較して、それらの変遷を考えていくもの。民俗周圏論は生活伝承の分布をみると文化の中心地にあるものより、周辺部にあるものがより古形であるとする論理である。

歌謡も生活伝承であるから、これらの民俗学の方法が通用するのは言うまでもない。特に南島は沖

縄本島を中心に先島の宮古、八重山、それに奄美の島々からなっていて、その島ごとに多様な歌謡を伝えており、これらを比較し重ね合せたり、沖縄文化圏（南島文化圏）の中心と周辺とを周圏論的に考えたりするのに素材は豊富である。

私はこのような方法によって南島歌謡の新古を縦に並べて系譜づける作業を、客観的に、すなわち形態的、数量的に把握し易い歌形、音律形について行なうことを試みた。本書のⅠ、Ⅲの章はこのようにして、南島古歌謡の歌形の系譜付けと、文学史としての立体像を作ることを述べたものである。

Ⅱ、Ⅳの章は、こうして組立てた南島古歌謡の系譜に基づいて、常々からもっていた歌謡についてのいろいろの疑問を解きほぐそうと試みたものである。例えば、抒情歌はどのようにして歌われ始めてくるものなのか。恋歌はどのような社会の中で、どのような経緯で作られ始めるものなのか。万葉の柿本人麻呂のような歌人は南島古歌謡には見られないものか。歌謡と舞踊とは原初の時代から伴っていたものか。神話や伝説は本来は叙事歌謡として歌われたものではなかったか。等々。これらの疑問に対しては、ささやかな、だが実証的な答を用意したつもりである。これらの疑問は南島歌謡に限らず、日本本土の古歌謡にも共通したものがあり、このささやかな答もまた無縁とは言えまいと思う。

終りに、青年期の私に歌謡を学ぶことの面白さを教えて下さった『吉野の鮎』や『古琉球』の著者をはじめ、多くの先学の方々、さらに島々の伝承歌謡を克明に記録集成された先輩の方々の学恩に対して深く感謝したい。また本書の出版をおすすめ頂いた谷川健一氏、高橋輝雄氏、また校正その他でお世話になった土器屋檀人氏に厚くお礼を申し上げる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# I

# 南島歌謡の発生と展開

# 南島歌謡の発生と展開

沖縄文学の代表としてのオモロは有名だが、そのオモロの母胎ともなったクェーナその他、南島に広く分布する蒼古とも言うべき叙事歌があることは更に重要である。そうした南島の古謡を総覧しつつ、その発生と展開とを考えてみたい。

## 一　クェーナ形歌謡の発生と展開

クェーナというのは沖縄本島とその周辺の離島で伝承されてきた歌謡でクワイニャ、コイナなどとも呼ばれる。現在、記録されて残るクェーナの数は六〇篇ほどに過ぎないが、その中の一篇、「うりづみごゑにや」を挙げて説明してみよう。首里を中心に婦女子の集会などでよく歌われ、踊られたものだという。うりづみは陽春・初夏というほどの意で、ごゑにやはクェーナのことである。

うりづみごゑにや（囃子を二行毎に「清らよう〳〵〳〵」）

うりづみの、初が苧　　陽春の初苧（芭蕉の繊維）を
若夏の、真肌苧　　初夏の肌美しい苧を
真竹くだ、つくて　　竹の管を作って
真竹いやび、つくて　　竹のいやび（管）を作って
尾花形、引き出ち　　すすきの穂の形に引き出し
ばらむがた、抜き出ち　　バラム（尾花）の形に抜き出し
大和から、下ゆる　　大和から持ってきた
かねの輪の、みをぐち　　鉄の輪の糸口を
御側、ひき寄せて　　お側に引き寄せて
御前に、ひき寄せて　　お前に引き寄せて
はたいむ苧や、績みむち　　廿読の細い芭蕉糸をつむぎ満たし
むすむ苧や、うみむち　　卅読の細い糸をつむぎ満たして
錘なかひ、つむぢ　　錘に紡ぎまきつけ
枠なかひ、繰ゆげて　　枠に繰って
吉かる日よ、選で　　吉い日を選び
勝る日よ、抜き出ち　　勝る日を抜き出して

十尋かせ、掛けて
八尋かせ、掛けて
廿読ふどちに、貫ちゅけて
卅読ふどちに、のちゅけて
巻板なかひ、巻ちゅけて
布機に、置ちゅけて
白糸びや、掛けて
赤糸びや、かけて
いなやう、かしち打ちゅさ
しちゅいしちゅい、織やがて
みちゃの日に、布なか
四日の日に、織りむち
澄むかはに、澄まち
朝がはに、濯ぢ
十尋竿に、下げて
八尋竿に、さげて
いなやう、湿しなゆさ

十尋枠にかけて
八尋枠にかけて（紐糸を作り）
廿読筬に貫いて
卅読筬に貫いて
巻板に巻いて
布機にのせて
白糸の綜統をかけて
赤糸の綜統をかけて
早くも織り初めたよ
パタンパタンと織り進み
三日の日に半分
四日で織り満ち
澄んだ泉に洗い
朝の川に濯いで
十尋の竿に下げ
八尋の竿に下げて
早もう湿しをして

いちゅ畳び、畳で　　絹物を畳むように畳んで
中巻に、からまち　　砧の中巻棒に巻き
いちゃぶなかひ、置ちゅけて　　砧台にのせて
ざらひ〳〵、練上がて　　ざらいざらいと練り上り
しちゅい〳〵、にやがて　　しちゅいしちゅいと練り上って
吉かる日よ、選らで　　吉い日を選び
勝る日よ、抜き出ち　　勝る日を抜きだして
おみなひ達、揃て　　姉妹たちが揃って
親加那志、御側をて　　親様のお側で
かしちから、身なげ取て　　織り初めの部分から身頃をとり
真中や、み袖とて　　真中は袖をとり
ちむみみや、みふすもの　　後織は衿と衽（をとり）
こむね形、截し出ち——　　衽の形を裁ちだして——

この後に「これで某里之子の大和行きの着物を作り——」という八行ほどが続いて、旅行者の航海安全祈願の歌になっているが、ここまでが古形を保っていると思われるので後略した。

沖縄の木綿以前は芭蕉布で、このクェーナはその芭蕉の糸とりから、芭蕉布を織り上げ、芭蕉衣を作るまでの全過程が克明に歌われている。糸から布へ、布から衣へと作業が移る重大な区切りでは吉日を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com